ASUN
HQ
1104
J74
1894
no.386

明治十八秊初刊

毎週土曜日發兌

女學雜誌

第三百八十六號

要目

君國事あり家に勤儉せよ
韓山風雲慘たり一家私人奉公の克己なかるべけんや、茲に烈告して同胞に諜る。

浦の狂女（新躰詩）
多年深く養ひたる一才子を新たに文壇に紹介す。其うたふ詩躰も亦た新躰也。

戰爭の福音
戰爭豈に博愛の福音と矛盾せんや、これ軍人求義會の爲めに演説せしもの。

涼風を起す奇法
涼を取る豈に風と水とならんや、靜思皆な涼を送るべし、茲に列擧せし奇法を見よ。

異見薰陶
もし白河樂翁公が人を薰化教育せしの秘訣を知らんと欲せば、此文をよめ。

明治二十七秊六月三十日發兌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百八十六號目録

社説

君國事あり家に勤倹せよ

文しらべ

巽見叢陶の訳(白川樂翁)

人心面の如くなれば世の中皆美人ばかり
壯年の時、かの花柳に遊びふけり
賢君きゝ給ひて
老僧打きゝて其狩人にあひて
そのもの茶を至て好みて
此十枚そろひし故に實さもいふなり
まづそのくせを常人へ知らせずして
異見いふものゝ不調法なり
人の惡心ならば我も少し赤面して
怒氣感通する故
にくいやつさ思ふ心よりの異見
その深切あまり迫切に至り
人をば人形の如くにきざみて

叩扉

園てる子を訪ふ(下)井上次郎

雜録

印度のラマバイ
聖書を止めるさは
ハリス教師より受洗し
ピショップ、ピカステス
寄金は何程募集せられしや
此他三四の談話あり
大ひに激せるものゝ如く

鴦波樓漫筆(たけぶみ)

文藝

同訓異義(完結)

徒然草

浦の狂女(韻文)ライミスト

講壇

戰爭の福音

開書

婦人の生存競爭(朧子)
婚姻○財産○熟練○職業の種類○普通教育

家政

凉風を起す法(少樂翁)
熱湯のきゝめ(しづ子)

片々

敢て一言を献す(巖本善治)
教育上の創見
政治家と貧民の慘狀
義慨賛成

時事

偶感一二

時報

裁縫速成科の增設○宮城女學校○女子學院○神戸女學院○裁縫十二戒○女生飯を止めて燒出されに賑はす○林廉子の永眠○勤王家松尾たせ子逝く○長壽者宮前れん子の來歷○京都婦人慈善教會○評論の評論

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第三百八十六號

明治二十七年六月三十日發兌

社說

君國事あり家に勤儉せよ

半島の風雲、將に慘烈ならんとす。

そもく東學黨、愛國正義の故に兵を揚げたり。彼等、異志あるとなけん、只だ、君側の姦小を除きて、國命を革新するに在らん也。閔氏、援けを清國に借り、清軍、韓に入りたるが故に、吾帝國は直ちに亦軍師を派遣したり。清國、何の權義と辭柄とによりてか、二たび我に對ひて兵を撤回せんことを要めたりとかや。吾帝國政府は、無論拒斥したり。李鴻章、之よりして更めて決するものありけん。幕僚を率竹林の私邸に會して、盛んに送兵を增さんとを議したりとかや。同時に、英國の軍艦二艘は、巨文島にあり。魯兵若干は、元山津に入れり。獨逸の國旗は、支那の商船頭に飜へる。此に於てか、外務省書記官、內閣の特示を齎らして、在韓大島公使に傳令せんとて、去二十二日出發したり。

夫れ、帝國軍師は、一に居留人民を安護せんが爲めに派遣せられたり。左れど、吾帝國が朝鮮王國に對するや、古來近代二つ乍ら非尋常の關係あり。其社稷の爲に、其眞誠なる獨立の爲に、其善良なる開化の爲めに他に擢んでゝ、助勢合力する所ろなかる可らず。之を障碍するものは、皆な拂除せざる可らず。されば、吾が帝國軍師は、極めて肝要なるの地に立てり。一機射發すれば、即時大軍を起さざる可らず。

二十世紀は、東方問題をもて其の元服となすとならんと期せしに、今世紀の年をあますに最早や五六歲に過ぎざるに、大勢は既に待ち切れずとや、早くも今歲を以て其の火ぶたを切らんとする也。

此東方問題を決すべきの日は、吾が帝國が山島を出づべきの日なり。全亞細亞洲は、日本帝國の運作をまてり。日本出で

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

ずんば此の大洲を如何せんと叫ぶ。此の天職は、今の日本に授けられたり。而して「更に大なる大日本」を建立すべき一大事業は、今の吾帝國の上に與へられたり。

勅に曰く、一旦緩急事あらば、義勇、公に奉ぜよと。今は則はち其の時なり。吾が帝國軍師は、京城南山に屯し、昔し、行長が攻撃ちたる東門を望み、清正が堂々として進入せし西大門に下臨し、明軍大に敗走して李如松慟哭したる涙跡を指呼の間にながめ、將に來らんとする大勢に身を献じて、今昔の感正さに切なるらん。吾等、國内に居て遙かに此の大事を懐ひ念ふ。たとひ身其地にあらずと雖ども、一志日ごとに韓山のほとりに飛ばざらんや。嗚呼、吾等は亦た大ひに戒愼する所ろなかる可らざる也。

彼の清國人、生平海外に出稼ぎして厘毛の利を爭そひ、狡猾卑劣、士君子が齒ひすることを恥づべき言行多し。然るに、彼等一朝國の大事に臨めば、忽然一和、大ひに其私財を捨て、軍資に献ぐるとあり。近世、英佛同盟軍、幷に佛蘭西と事あるの日、此の善功を遺して、今に至る迄、嘉志歴々たり。彼等また國家に忠なりと云ふべし。

然るを況んや、吾等君國の民。此國の爲めに奉公せずして果た何の爲めに生きんや。政界の爭闘も君國の爲めなりき。議會の衝突も君國の爲めなりき。今や外に對して君國の大事あり。吾等同胞齊然として一和せざらんや。烈告す、吾等が同胞、胸を連ね、意を合せ、いざ君國の爲めに同もに共に盡さん。されば先づ一事を約して、今日より相合して奉公の料となさんか。曰く、互ひに戸内私用の費えを節し、同胞韓山にあるの人を念い、一朝事作つて戰血流るるの苦劇を推想して、先づ今日より大ひに勤儉せん。もし有事非常の時を念ずれば、酷暑の苦は何事ぞ。懶思警然として、乍ち發奮せざるとなし。あゝ同胞、いざ今日より一層の勤儉を爲さん。而して、相節する所を献げて、君國の公用に足さん。

如此き勤儉は、家庭より初まる。家庭の主婦たるもの、及び關係者は、之よりして大ひに克己し、大ひに勤勉し、大ひに節約する所ろなかる可からず。君國事あり、一家何んぞ安福を貪ぼるべけんや。軍士、外に苦役す、内にあるの同胞安くんぞ、逸樂に耽るべけん。警告す、吾等が兄弟姉妹。相約して盛んに安逸の夢を破らん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文しらべ

異見薫陶の說

白川樂翁

異見をいふは、先づ吾が言ふべき處の筋を自からとくと觀るべし。我心の筋を能く考ふれば、言はずとも濟むともあまたなるべし。なまじひ言ひて用ひずとて爭そひ、つひに交りをたちて高潔なるやうに思ふは、みな是わが疳癪なり。その氣より人をば一てんのきづなきやうにせんと氣をもむは、則はち疳癪にして、そのところ能く心の如くなるならば

　人心面の如くなれば世の中皆美人ばかり

出來べき道理なり。その事をば思はず、きづなきやうにと思ふは、皆な其きづと見る所は我が物ずきなり。かの薫陶と云ひて、すゑものつくりのろくろの上の土、手に應じて茶碗や德利になりて土も知らずして形をなすを云ふ。さて聞及びたる事を一二しるす。あるもの、

　壯年の時、かの花柳に遊びふけり

夜をふかしてかへる。その母うれひてそのよめによくいひふくめ、少しも恨める色を出さず、寒夜ならばあたゝかなるものをこしらへおき寒夜の勞をなぐさめ、母もとも〴〵出で何かと志をつくして、やすくいねよといひ母は早くいぬ。よめにはかねていひつくる事故心をつくしかいほうしてきげむをとる。かくの如くする事しば〳〵なりしかば、其情にも感じ、はづる心出來て、夜行をやめしとなり。又ある豪富の町人の子、ひたすら遊所に通ひしを親なげき、ある賢君へいかゞいたし候はんやと伺ひしかば、

　賢君きゝ給ひて

金子千兩その子にあたへ遣すべしとの事也。ふしんながら右之通りにすれば、數日其金をわが側におきて夜行もせず、かほどの金子、遊興につかはんは何共殘念なる事也。何とかせんと思へどせんすべなしとて、其金を父にかへして遂に遊興をやめしとなり。又ある狩人猪鹿を鐵砲にてとる事を業にするうへに、殊の外このみたるを、其母ことに氣の毒に思ひて、ある老僧をたのみて、此殺生をやめさせ給へといひけり。

　老僧打きゝて其狩人にあひて

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

殺生好むよしきゝしといへば、かならず禁ずる事と思ひて、いかに說法し給ふとも此殺生はやめがたしと、かのかたよりいひ出したれば、それは汝が職業の事ぞ、いかでそれを禁ずべき、只いふ事あり、鐵砲にて打ころさむと打たるとき、いづかたへか玉あたり、かくたふれ、かく聲をあげ、手足を動かし、かくしてつひに死せる時はかくありしと、一々これに心をとゞめてしかと忘るまじ。かくさへすればいかほど殺生しても苦しからずとをしへしかば、その敎の如くなしてければ、つひに忍びざる心出來て、その殺生はやめにけり。またあるもの至てよきものなるが一つの癖あり。その癖なくば名をもあげ、人にも用ゐられ、世の寶ともなるべきが、一癖いかにしても改むへきさまにあらず。さて

　そのもの茶を至て好みて

よき道具をば何にもかへがたく思ふばかりのさまなり。それにかの一癖を異見せんとて古渡りの南京の皿十を持出でみすれば、涙こぼして賞し、この舶來の磁器十枚そろひてある事は、天下にたぐひなかるべし。又あるべしとは思はずと、くりかへし賞嘆するとき、鐵槌を袖に入て、その一つのさらをみぢんにくだく、かれその驚きをしみたるさまいはんかたなし。失色なみだをこぼし、失心はせずやと思ふけしきなりしかば、われ失心はせず、

　此十枚そろひし故に寶ともいふなり

汝の所行よき所多けれども、一つ此筋にかくるは南京の九枚になりしと同じ事にわれは惜むなり。此かけを拾ひて守りにすべし。これを見て一つの躬行のいましめにせよと、言葉かずも態といはで、其かけをやりたれば、又涙こぼしてかけを持行き、つひに過行を改めしなり。その如く癖弓を直すには

　まづそのくせを當人へ知らせずして

つり合ひと拍子を以てくせを直すなり。はやけをおそくはなせといひたるとて、もとよりその心ながら、心の外にはやくはなすが早氣なり。それには調子をつけてまきわらを射させ、知らず知らずたもたれるやうにも出來るなり。如レ此ことをもわきまへず、叱りつけて理くつを詰れば、直ると心得る故、人の異見のせんなきといふは先きの人にはあらず、

　異見いふものゝ不調法なり

初め書きたるわれに省み人に見くらべて、たゞそのものゝ爲

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

によかれと思ふが恕の道なり、忠の道なり。まづ人の心は耻を知らしむるにあらざれば人々よろこび服せず、面折して先きの悪事をいへば、いはるゝ所に慚て恐るは人情なり、その情を知らずして、かれは同社中かねて服臓なく異見いへといふによりていへば、云々のさま也、いふところ心とは反せりといふ。かくの如くなる人情不通の理窟ばかりの不調法にて、いかで人を陶化せん。既に敬て五教を敷く事寛にあれとはいはずや、この敬寛の二つを能心得るが異見の要と知るべし。

人の悪事ならば我も少し赤面して

聲ひそめて人の居ざる所にて深切にいひて、惜き人材惜き家柄、かやう／＼にて人も知りては大事ぞと、ひそかにいひながら、悪事はあからさまにはそれさへもいはず、かくして深切をつくし、かげひなたになりて親しみ遣はし、力になりて時には先きの難義を救ひ、第一にその人を賞してよくいひさとすべし。然るに今何がしにかくと異見いへば、早怒れるによつて不孝不忠なる事をいひつらねて、はぢさせんとせしなどと笑談にいふ。その心にては、

怒氣感通するゆゑ

先きにても勝氣増長するゆゑ負くまじきといふ念ある故、かの横紙やぶりといふ如く、みづからよしとは思はねども、異見いふものに對して放言遁辭して、聊もきかぬなり。いはるるものも無理なる事をいふと、互にのゝしる、いふものもかの癇癪にて、異見きかずと顯然と人にかたり、

にくきやつと思ふ心よりの異見

故に、きかざるも道理なり。國家の刑罰もにくきとて罪する心にては、刑罰の意にたがふなり。皆にくきとて戰爭し、にくきとて刑罰し、つよくいためてやらんなど、思ふは、やはり罪人にも敵にも合氣になる也。合氣になりては、同輩の智德あれば、いかで人々その敎を信じ、その掟に隨はん。此所を體して、諸生を陶化するにも敬て寛といふ事をゆめ／＼わするべからず。諸生と合氣になりては行はれぬ事とよく思ふべし。然しもと玉成せんと思ふ深切はあれども、

その深切餘り迫切に至り

一點のきづもなく直に賢人君子になしたく思ふ心、つひに大なる不深切に至る。いかで如此にして人の上にたゝん。皆初めにいふわがものずきになすなり。されどもわが言行は又わ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

が物ずきにもならざれども、それは俗にいふ棚にあげて、わが存養省察をば盡さず、たゞ

人をば人形の如くにきざみて

物ずきの如くせんとする。此心にて教化せんとは、思はざるの甚しき事なり。

叩扉

園てる子を訪ふ（下）

井上次郎

印度のラマバイ

の話し出でたるに、照子は惜しんで言へらく、ラマバイも余程のユニテリアンとなり、其の女學校にては、一切、聖書を教へぬよし也と。余は、ラマバイと語りしこと、二回に過ぎざりしが、其凡骨にあらざること明らかにして、容易すく信念を棄つる人とも見へず、但だ傳道の方に至つては、國風に隨がはざる可らず、ラマバイほどの人物なれば、覺悟あつて教育方法の變通を爲すところあるならんと言しに。實に然ることも候はんが、妾が英吉利の父と申し居る、ドクトル、ペンテコストが印度に行いて、ラマバイの女學校を觀しとき、確かに彼が固信なきことを認めて歸國し、公衆に報告せられしに、彼は素早くも之に先だちて英米の新聞紙に投書し、近頃ろ大ひに悔改せしなど披露して助力者の好意をつながんとせりと語る。余は亦た言ひぬ、左れど、國によりて傳道の方を異にするとも、直ちに目してヲーソドックスを止めたりなど評するは、宣教師社會にありがちの事なり、氣力ある志士の行爲は、外形をもて直ちに輕評すべからずと辨ぜしに。照子、直ちに應じて言へらく、眞に左樣には候へど、英米の人々にあれほど世話になり乍ら、

聖書を止めるとは

濟みませんではありませんかと。余は、則はち言へり。左ることも候はん。扨て、アナタは、何如なる風に、學校內の傳道を爲さるべきやと問ひしに。夫はもとより國風にも由りますることで、一々宣教師の爲さるようにも出來まじけれど、聖書の講義をして妾が經驗せしことなどを話しきかせるつもりなりと言はる。米國にては、何處の教會に屬し、又、資金募集

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

には、ミションの助けを假り玉ひしやと問ひしに元と

ハリス教師より受洗し

桑港のメソデスト派に屬せしが、資金募集は決してミションの手を假らず、たゞ日本婦人の女子教育に對し、妾を助けんとする人は助け玉へと叫びて要めしのみ。もとミションの手を假りなば、今少しは、容易なりけん。中には、或るミションより相談あり、吾が方に來りくれなば、一切教育の事をまかせて、且つ資金をも募らんなど申されしが、本懐に反けばとて斷はりたり云々。現在は、何處の教會に出席せらるゝやと問へば、出席は、

ビショップ、ビカステス

の監督教會なれど、芝の獨立教會は、日本人の手にて獨立するものと聞しゆへ、ツケ屆けなどは其の方に差出すと言はる。蓋し、和田秀豊氏の芝教會を指ざす如くなり。こゝに至りて、彼女が固有する一種の男こ氣、明らかに顯られたり。彼女は、たしかに、江戸子の大姉的俠氣を有するなり。

資金は何程募集せられしや

と問へば。眞とに、其事にて候、過日も、ミセス、ツルーとお話して、笑ひし事なるが、金を募れりと言へば、莫大の事のように思はれ、途に遺ちたる黄金を手あたり次第に拾ひしように想像せらるれど、仲々に六かしきものにて、存外の事にて候。しかし、此の新築を爲すとと、一年位ひ支へるとは出來まするつもり。あとより、照園協會と云ふを組織し、友人より助資を送りくれると申せど、夫も手に受けぬうちは、當にはなりませぬ。余は問へり、ミセス、ツルーとは別懇にせらるゝや。眞とにお親しくいたします。其外、たれか殊更らに助力せらるゝ人ありや。まだ、御座りませぬ、何分、經驗のなきもの、万事御注意を願ひます。

此他三四の談話あり

米國女子大學のカッテーヂ、システムにつきては、特に感服せらるゝものゝ如し。余は、こゝに至りて、照子が洋行前の一事實につきて知れる所ろを語り。扨て問ふよう、近頃ろ、貴君の事につき所々より質問書參る。ことに、西京の一人よりは、近頃ろ救世軍の大將として歸朝せし人より聞しとて、申越されし事あり。貴君は、何か思ひ當らるゝとなきやと言ひ出でしに。照子、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

大ひに激せるもの丶如く其事につきては、實に申すとを好まぬほどです。先きに申せしラマパイが、信切らしく見へたる一米國婦人に附き添はれ夫にアヤドラレて、意外の損を爲せしと事同じく、妾が英國にありしとき、某と云ふ一婦人、旅人をねんごろにせよとの聖訓を守るまねして、妾を殊の外いたわり、始終妾につきまはりて、ひそかに莫大の利益を取り、妾は非常の損を爲せし。友人等の注意にて初じめて分り、遂には、或る宗教裁判を開き、敎師の前に立合ひて對審いたしぬ。此の某婦人と何如なる關係あることにや、彼の救世軍の人は相ひ協同し、切りに妾の事をあしざまに言ひふらし、歸朝の后も毎度來訪して樣子を見らる丶如し、妾は二三度拒絶せしともあり。英國にて彼人はアヤマリ證文を出したり。くはしくは、公使館の書記たりし吳大五郎氏なども御承知なり云々。余は、玆に至りて辭去し歸途つく〴〵と彼の女が前途の事業につきて思案したり。彼女は一事を除く外、田村直臣君を女にしたらんが如き人なり。彼此と評判のみして、彼女に直ちに接面せざる人多きを氣の毒に思ひぬ。

雜録

蒼波樓漫筆　たけぶみ

◉女學先生頃日活風流を談ず、われ其言の神髓を貫くを喜びて頻に思を寄すると切なり、風流とは何ぞや、これを釋する愈々詳にして、そのもの益々われを去る、それ風流は美しく、けだかき女神なり、汚れたる心、賤しき思をもて、その玉の如き御手を握らむとせば、飄々として飛むで白雲の鄕に去り給はむのみ。

◉風流とは何ぞや、水に映ずる月の如し、これを手に掬せむとすれば漏れて影なし、是に觸れむとすれば光碎けて消えなむとす、淸光水に落ちて水に聲あり、漣うね〳〵として金龍を躍らす、掬せむと欲せば影なく、觸れむと欲すれば碎く、形あつて形なく、光あつて光なし、然れども人若しもろ〳〵の煩悩を去り、くさ〳〵の私情をなげうちて、靜座深念する時腦底最奥の琴線戞々たるものあらむ、われわれを顧みれば幽

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

妙高遠羽化して蒼空に翔るの想あり、この時の感如何。

◉青年の士無限の希望をもたらして空しく黄泉の客となる、人生の恨事これより大なるものあらむや、而も生前一室に起臥し倶に逍遙し、倶に論義し、憂をわかち、樂をわかつの友と一朝にして幽冥境を異にするに至らばその感果して如何、去歳八月われ病餘の身を以てわが親近の許に到るこれわが亡友の家なり、その書函を開けば愛讀の書、記錄の稿何れかわが涙の種ならざらむ、黄昏そこらあたりをそゞろ歩きて友の墓を訪ふ、桑園を横ぎり石級を登りて薄暗きまでに常磐木生ひ茂りし下蔭、幾十の碑は累々として相列り、苔むし石欠けて轉ものあはれの情に堪えず、なほ登りて最後なる山の側面に到れば、わが祖父君の碑と列りて子なるわが友の遺骸は父君の傍に葬られたり、あたりに草繁りて二輪三輪さゝやかに咲きし桔梗の花、露を含みて寂しげにうなづき、虫の音のたえ〴〵なるさへあはれなるに仰ぎ見れば蒼々たる古松晩風にざはめきて無限の悲歌を訶ふ、聽くもの何ぞ情に堪えむ、嗚呼君が遺骸はわが足下數尺のところに埋まる而かも君が魂は已に遠く去つて相見るによしなし、泫然として、ぬかつき悄然として躊立徘徊す、飯塚猪三郎君の名は若干の朋友親族鄕人の記憶に印せるのみ君が天才學殖に於ては世人知るところなきなり、君逝きて茲に一年半餘、當年を追懷して感極まりなし。

◉人世の悲は死より大なるはなく、人世の憂は病より大なるはなし人一とたび病むで生死一髮の間に至らば其眞面目は油然として四肢言語に溢れ來らむ、何となれば彼は世に何の恃むところなければなり、猛惡も狡智も其用をなすなくたゞ一念を生死に繫げばなり、この時に於て同情深き一言の慰めを得ればうれしくかたじけなきの情はその骨に徹するの思おらむ。

◉人あり、わが缺所を指摘してわれに敎ゆるところあり、この時われは顧みてこれを改めむとするに至るは益の大なるものなれども、其指摘せられたる缺所のわが意にかなはざるとき昂然立つてこれに答へむとす、然れどもわが身の境遇に掣肘せられて、いはむと欲して、いふ能はざるほどあはれなるはあらじ、暫らく忍むで時を待つべきなり。

◉批評といへばうるはしけれど書を評するに讀まずして、これに賞辭を與へらるゝを聞かばうれしきものにはあらず、前代

の批評は賞讃するの謂にして、今時の批評は罵るの稱なり評家が先づ新刊の書を探てこれを撿するや、その缺所を指摘せざればやまず、もし一二を指摘せざれば批評らしからずと思へばなりと、これわが友のいふところにして頗奇嬌に失するものあれども亦よるところなきにしもあらず、缺所を指摘するはよし、然れども若し缺所を指摘してその長所をいはずむば如何、嗚呼批評の道荒廢するや久し。

文藝

同訓異義（完結）

ム

ムクフ

報　そのなりゆきのことをさきへうつす事
讎　對する敵あつてあたり合ふ事
酬　手前にうけたものを向へうけさせる事

メ

メグル

巡　ゆきまはる事　すゝみえすたちもどる事
廻　ものゝ自めぐる事
環　めぐりて始と合つて端なき事　わのやうなるものを云
運　段々めぐりてゆく事
循　ものにつきしたがへて行く意　海のはたをめぐる事
旋　くる〳〵とめぐる事　―風―毛

モ

モト

素　きぬのそめぬ下地のことを云
本　根もとの事
元　はじめの事　手のつかぬさきを云
故　したじからそうなりきたる事

モテアソブ

弄　なぶりまはす事
玩、翫　それなしともなくとりあつかひなぐさむ事

ヤ

ヤスシ

安　自らおちつきてなる事　あぶなげなき事
康　すはる氣　おちつきのできてたのしむ意
泰　おちつきたる中に寛大なる意
寧　それがおちつき定る事
易　ものゝむつかしからぬ事　すつきでけやすき事
保　そこなひやぶらぬやうにかゝへそだてゝゆく事

ヤム

已　それぎりにやんでしまふ事
止　行きさうてそこにとまつておる事
罷　その場をしまふてのく事
息　やみたへてあとのなき事
歇　まだ來さうでこぬやうになつてやむ氣味
廢　それきりにしてしまふ事

ヤブル

破　射あてうちあてゝやぶる事
傷　きづ付そこなふ事
敗　事ならずしてやぶる事
毀　ものゝかける事

ユ

ユク

行　あるきてゆく事
詣　その所にもうでいたる事
逝　向へのきゆく事　ゆきさりてしまふ事
之　こゝよりかれにゆく事

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ユタカ

豊 ふつさりとみちふくれたる事

裕 衣服の身のひろき事 ものゝゆつたりさした事

ヨ

ヨル

凭 もたれよりかゝる事

倚 よりかゝる事 もたれかける事

寄 みのこころによつてたる事

従 それからこれからと云氣味

頼 たのみよる事

自 それから此からと云ふ氣味

依 したかひよる事 よりそひつく氣味

仍 よりしたかふ事 みのなりにしたかいゆく事

縁 よりつたふ氣味 つきてはなれぬ事

因 下地によりそふてゆく事

據 それをしやうこにしてよる事 ふまえさころにする事

ヨロコブ

喜 心のうき〳〵する事

怡 よろこびたのしむ事 顔色のにこやかなる事

悦 心のうれしき事 心にたんのうする事

慶 めでたしさいわふてよろこぶこゝろ

ヨシ

良 うぶからしぜんとよき事

好 みめのよき事

吉 きづかいげのなき事

可 十分と云ふではなけれどもこれてま あよしと云氣味

ワ

ワレ

我 人に對しわれをみごもと云事 ひろくさすことば

予 おれと云こゝにあたる

子 男子の通稱よつてわれと訓す

余 われらと云事われ一分にかぎるなり

吾 我と同して少し異なり、莊子に吾忘我吾は本心のわれ我はがまんのわれ

つれ〴〵草

こんな新躰が出來たが、かりに之を十音詩といふ、十音を以つて一行を成す。もとこれ七の句や五の句が一行の初めに來たるをさけた爲め、三三四に誦するものなれど、直に之が脚なりといふは先づあづかりとして、詰める音は音數に入らず、前なる音に呑み込まれてしまふものもまた然り。二音相合したのは一音なること勿論。すべてかゝる場合は、最初の音の外は片假名を以てしるし、その獨立したものにあらざることを示す。若し然らずして、矢張平假名のときは二音に延ばしたるものと知るべし。漢語もまた、特別の場合にあらざる限りは、一音を以つて一音とす。韻は、この詩の如くかたみに踏ませば、二重韻をよしとす。いまお目もじするこの狂女、たとへ根からいやしき漁村のうまれではなけれど一旦こゝにをとこを持つたからは從來の如くお姫さま見た樣な句調はなり申さず候。こと更らに俗語を用ゐたかど無きにあらねど、そこは物にうつり易き女のこと、あはれとおもッてお目鏡を乞ふ。

ライミスト識す。

浦の狂女

その上

「いを取ろ。をとこ 取ッて、なォ、
かへして たも！」……さも 一心
さけぶ をンな の 氣 うしなォ、
すがた 亂髮 見ても 狂人。
よする 小なみ ちョろ〱、
なぎさ 歎く すあし で
は世來たれり。「いを 取ろ。
をとこ 取ッて、なォ、かへして。」……
「よし。あみ に かゝッたら、
かへして やろ。」……つね〱
馴れた こたへ から〱、
わらふ 漁者 の しもぶね
さむさ を 切ッて いで行く、
ほそき かい と 櫓 の おと。
さぎり 殘こして、しるく
立てる しほ の すぢもと、
あまた つどォ かもめ あり。
をンな は 小いし たび〱
投ぐれば 飛びあがり、
飛びあがれば もォ 浮かび。
飛びつ 浮きつ 羽根 振る。
こゝろ も ゆかし を、ひとり
あけ の かぜ に もの狂る。
こゝろ こそ よぶ子どり。

おゝい、をッと よ、わがをッと！
ふなで した 夜あけ から、
いまで いち年。なぜ ちロッと
もどッて くれぬ、いま更ら
わし を 見捨て は しョまい。
さりとは、ても、よいをンな
持たしャンして、なさけない、
よそで 一所に、えゝ、どンな
にッくい ゆめ を 結すぶ か？
さりとて また おやかた、
なぜ 大事の を うか〱
のこして 來た、わがあた。
えゝッ！ みな と 申しあはせ、
かわい をとこ ひとり を
かい 以ッて うち殺ろさせ、
うを の はら と 爲せし を
人 や 知らぬ？
あはれ いち面 に なぎて、 おきかぜ、
茅渟 の うらわ を、なぜー
たより なく のみ 泣いて、
あはす ときは枝 の こと。
ね も みどり、かみ ぞ 着ろ。
身 は あさき みづのそと
小なみ よせた さむしろ、
しろき 濱 に さらした
はだへ こゝに 一しュん秋。
しみる ばかり、このあした、
こがれ こがる その意中。

その中

あはれ、はじめ こひ 知ッて、
たがひに したッた も ゆめ。
このまつばら 松 散ッて、
積ンだ こく葉 掻きあつめ、
さむき そで を ぬらす根、
ふたり が たば 結すンだり、
むすばれた むね と むね。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

苦を わすれて、苦のはり
却へって ました あいだ を、
つゝむ なさけ ぼろ〳〵、
やれて 落つる なみだ を
か細その 手 に ぽろ〳〵。

たもちかねた 夜つゆ の、
もろき ちぎり いまゝで
つゞけた のも、いづく の
いつ 蒔かれた あだゝで！
さけ も からき 世の中
すいた をとこ 持つほど
つらいものゝ、たまさか、
漁夫 の つま と なッたとゞ、
かくも つみ 深かし とは
知らなンだ 南無阿彌陀佛！
ほとけさま も さりとは
あまり むごい ぞ と、鬱々、
しのぶ 亂だれ そめたり、
かぜ に 解くる くろかみ。
げにも、あさり〳〵、
結すぶもの は うをあみ、

くし も けづらざるまゝ、
をッと の 早やき ふなで を
でゝ 見送くる このはま、
こゝろ 殘こる うみべ を、
にくや、さぎり いだける。
うち は とま屋 自分 と 子、
日くれなば をッと 歸へる
また おそし と 待つとこ。
かざる かゞみ ある無く、
しける こも に 意 こめし、
あはれ、寐や の 屛風 無く、
かすめる かぜ うらめし。

こひ の ばち は くろがね
かたき むち を こ堪へて、
死ぬ ばかり を 死にかね、
かくも つま と 子 こめて
おしむ 一とつ の からだ。
あはれ、いろ香 欲しても、
まづしかみ が 身 の あだ。
狂るひそめた とは、ても、
うべ なれや をな子 の 念！

ある日、待ちし ふね こそ
歸へり來たれ、こゝ 五年
こがれそッた 人 は よそ。
たより 無き を かなしみ、
いよ〳〵 こゝろ 失しなォ
すがた に こゑ も にじみ。…
「いを 取ろ。をとこ 取ッて、なォ、
かへしてたも。」…泣きつゝ、
そら の とび に 身 は かなォ
すな の うへ に 舞ひつゝ。

その下

なきつ 舞ひつ すなのべ、
つる ならねど、一とこゑ
たかく 達す か 天の野べ！
ひがし はるか いろ 添へ、
のぼる 日かげ ちら〳〵、
こゝろ も 散ッた 松の葉。
播きあつむる 小兒ら
あまた つどォ くち しろ齒、
むきて 笑らふ まねこと。
「いを 取ろ。をとこ 取ッて、喃、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

かへして たも。」わしもと
ちかく なぶって 仕かた 無ォ、
「これ、堪忍 してくれぬ か」
と 狂るャ、こゝろ しきりに
似たり うごく いしづか。
無情 の からす ひだり に
拂らへば みぎ に 來たり、
みぎ はァへば また ひだり。
まへ に うしろ 堪へかね、
小いし 一とつ ひろいて
投ぐる と する 身のまね。
あはれ、みな おどろいて
にぐる かげ も のこらず。
しも や けむる あさかぜ、
迷よひ なほ 覺めやらず。
こひ の うみ を 搔きまぜ、
さぐる あみの目 あらく〳〵、
にがした ごと きょろ〳〵。
で逢ふ 人 の べつ無く、
訴たへ いはく。「いを 取ろ。
をとこ 取ッて、喃、かへして。」
ひとり 行きつ もどりつ、

歸へッた 人 を うらみて、
歸へらぬ 人 かこちつ。
さばれ、からき しほの世、
漁者 の かみ は 住吉、
めぐみ たれて 給まォ とよ。
はるか いち葉 おし〳〵、
よせて 來たる 人 あり。
うら は いでゝ 獵すとき、
誰 ぞや？ ひとり あやまり、
歸へり いそぐ あのおき、
かたひ 聽こえざれども、
すがた さしも おなじき。
おゝい、たのも、たのも！
早やく わし が こひしき
をとこ かへして たも と、
すそ からぐる やさはぎ
つけて さむき 櫓のおと。
なびく ふね を かさゝぎ
渡たす 橋 と 誰が 知らン？
「をとこ 取れた か、どこッ」と、
のぞく 中 に 何に あらン、

かい 一本 以ッて 立つ そッと。
「お駒」……「わし が をとこ は？」……
これだ と いはン むね一杯
むッと つかへ のぼッた とは、
狂氣 と うらみ も 一體。
わが留守 に 他の をとこ
さては 持ッた か、なさけなィ。
じッと にらむ そのざうこ、
はッと まッすぐな 氣 は しなィ
ふるふ こゑ よ、これ、コヤァ
飛びあがる をとこ 取ッた？
ちェ、ありがたい、よくも、まァ、
もどッて くれた、待ち居ッた、
あンまりじャ と だき合ォ 砂上。
待つも 狂るひ、逢ォ とても、
また 狂氣 なり 人の情。
かぜ さゝさ、無常 の こゑ も、
聽いて ゆかし 天のとこ。
狂 は こひ の かりまくら、
ゆめや 深かき 地のそこ
ゆるぐなかれ このうら。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

講壇

戰爭の福音

右、『軍人求義會』例會の席上にて演説の摘要。

◎平和の主と謳はれたる基督、かつて門弟子に警しめて曰く、地に泰平を出さん爲めに我來れりと意ふなかれ、泰平を出さんとに非ず、刄を出さん爲に來れりと。これ豈に愛の福音を誤解したる門弟子を警發せしものにあらずや。而して、此の警發を要するの時狀何處にも起りがちの事と見へたり。基督敎は、絶對的に戰爭に反對するものと誤解するものあり。然らざるも、其の贊成せざるものと誤解するもの多し。博愛と劔戟とは、全たく衝突するものと思ひ、クリステアンにして鐵砲を發つは、愛の敎と矛盾すと憂慮するものあり。基督の敎を偏解して、かくの如き狹小なる平和主義なりと思ふもの絶へざるにより、「地に泰平を出さん爲に我來れりと意ふ勿れ」と警發し玉ふと、今も尙ほ止むとなし。

◎人生の運命は、進歩發達にあり。進歩發達とは、競爭戰闘の事なり。たゞ其の形狀の文野によりて、文明野蠻の名を下すといへども、必竟爭闘戰爭を絶つとあらず。詩人、天地を見て、其美くしきに眩し、彼等は自然にして平和なりと思ふ。曰く、万物靜觀皆自得と。されど彼等は、實際に於いて激戰しつゝあるもの也。ダル井ンは、之を生存の爲の爭闘と云へり。優勝劣敗は、眞とに天理なり。或人、クリストの敎は、弱きものが勝つにありと言へりしが、勝つものを弱しと云ふの理あらんや。すべて勝つものは、皆な强き也。而して、强く且つ勝たんと欲するが、天地間の大道なり。之が爲めに、競爭戰闘するとは、永久止むとあらざるべし。但し此の競爭戰闘の形及び階級にも亦た上下優劣の品等はありと覺悟せざる可らず。

◎通俗所云る戰爭なるものは、眞理の裁斷の爲めに催ふすとあり。暴を挫き邪を平らぐるの爲めに催ふすとあり、義を主張し善を實行するが爲めに催ふすとあり。夫れ、正しきの爲めには、個人その身を殺すも尙ほ厭かざるを道とするとを知らば、一軍の人、一國の民、亦た正義を守らんが爲めに自他の血を流し骨を削るとあるは、當然の運命にあらずや。戰爭

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は、道に違わざるのみか、時としては、道を行わんが爲めに必要缺くべからざるの處置なりとす。

◎或人曰く、戰爭は、暴力に訴へて優劣を決するもの、極めて蠻野のものなりと。然り、吾等が理想とすべき最上等の判決方にはあらず。左れど、人文進歩の度合に於て、當時此の外に訴たへ可き別方法を實行しがたきを如何せんや。冀ふ所ろは更に高尚なる判決方に據らんとにありと雖ども、對手にして未だ進歩せず、暴力を以て吾に加へんとする時は、亦た暴力を以て戰ふの外あるべからず。これ、暴を以て暴に代へんとするにはあらず、彼の暴を抑さへて而して吾が正を之に代へんとするにあり。もし彼の暴力をして横行せしめば、これ正を抑さへて暴を之に代ゆるなり。天下を暴力の支配となす也。これ豈に義人の容すべき所ろならんや。

◎戰爭の福音を聞けよ。陰雲鬱積する所ろ、霹靂迅雷なかる可らず。戰爭は幾分の人を殺して、多くの人を生すもの也。巨砲の丸は、戰場の一隅にのみ走れ、其影響は、全地に濺ろきて、人心を警醒する也。流るる血は、無益にあらず、天下の熱血を熱せしむ。倒れし骨は徒らに枯れず、万人の氣骨を

立つ。戰國時代には、惰弱少し、道を悟るに早し。佛教は、源平の戰の后に盛り、ヂェスイト教は、織田豊臣の戰國時代に流行したり。

◎軍人は、戰爭の時の用を爲すものとのみ誤解す可らず。其の大ひなる功勛は、太平時代に於て立らるべし。一朝、戰開らけ、馬嘶なき、砲聲轟ろかば、儒夫といへども、尙ほ氣を引立つべし。軍人が、軍氣を煥發せしめ、大ひに其の感化を流布せしめべきは、寧ろ太平時代にある也。寡慾、勉勵、堂々、凛々として、文弱、優柔の過弊を矯正するは、軍人武士の天職にあらずや。文士は、國民の趣味を美ならしむべし。武士は、國民の元氣を武ならしむべし。ともに、其の天職也。故に、武士軍人の天職の實行を切望すること、開戰時代よりは、寧ろ、太平時代に多し。然るに、彼等、太平に醉ひ、反つて文弱に誘惑せられ了る。これ戰かひ負けて犬死したると同じからずや。鬨の音に初めて氣を引立つれども、三味の音には、ウッツを固くするあたわずば、これ豈に勇壯なりすべけんや。余輩は、軍人諸君が、其の天職を重んぜざるを惜む

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

もの也。

◎すでに戰を開かば、眞の軍人は、暴力に勝つことを誇るべからず。暴力に勝つて而して正義を煥發せしめたるを誇らざる可らず。劍戟の影より、正義を映射せしめ、流るる血に赤誠を染めて、枯骨を道に活かすの抱負なかる可らず。

◎軍人の義を求むるは、極めて佳し。眞の軍人は、太平時代に於て、軍氣を鼓舞し、開戰の最中に太平和の福音を忘却せず。之をクリステアンの軍人と云ふなるべし。

閑書

婦人の生存競爭

朧子

中以上の婦人たりとも、職業を習ひて万一獨立するとあらん時の必要に對し、準備すると云ことに何か不都合有之候はんか？もと産業を受け繼ぐと定まり居りてさへ、男子は尙ほ此目的をもつて、教育致され候樣なるに、婦人に至りては、あてになる樣な、ならぬ樣な婚姻といふ一事を賴ませらるゝ耳にて、万一の用意とては與へられず、依ていとも哀れなる境

遇に陷り候こと屢々有之候。右に付き、父兄たる人々に少しく注意して戴き度ふし〱左に認め申上候。

婚姻

は元より婦人一般の希望の正鵠にて、本來、然る可きことなれば、其希望を達すると共に、生存競爭の必要は全く止み候とも有之候。併し婚姻には、賴む可き庇陰の必しも伴ふと申すものならず。死といふ魔物あり、破産といふ不慮も有之候て、斯の如き場合には、婦人がかせぎ人と變じ申すべし、子供を持てる人ならば、困苦は一層深きことに候はん。斯の如き時に、獨立す可き術絕へ、あはれ冷やかなる世の慈善にすがり候ほど、心細き場合は有之間敷候。

財産

ある婦人は同樣生存競爭の外に安んずるが如くなれど、動産、不動産ともに、時には動き出して、跡を遺さゞると有之候。たとひ其原因は詐僞なるにもせよ、失敗なるにもせよ、共に不慮に來るとなれば動産不動産に勝りて更に堅固なる遺産を授け置るに非ずば、父兄の御役目は濟まぬこと被存候。そを何かとなれば、婦人其人より取つて放つことを得ざる一の藝能の事

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

にて、依つて身を立つ可きの武器を申譯に御座候。

熟練

といふと、今の世の中には、中〱の價値を有し候。ナマナカのものにては、間に合ひ不申何の技にまれ、熟練いたし候はゞ、成功獨立は知らぬ中に伴ひ來り申候、昔しの人が(ウエブスタア)申され候通り、職業は如何ほど多くこれに從事する人ありとも、上の方にはいつもアキ有之ものゆへ、さまで高尚ならざるとにてもよければ、但だ一事に拔ずるが肝要に御座候。候補者は何れの道にも多し、辛抱せではかなわぬと存候。總じて需要を正鵠にとりて、熟練を加ふれば充分に候。

職業の種類

は本邦に於ても追々に多く相成、裁縫に結髪、とりわけに洗濯位より他に手内職のなかりし昔とは大なる相違有之候。女子を教育するに先だち、其人の嗜好、傾向に注意し、最も愉快に最も成功し易き方を撰び候が專一に御座候。赤子の折より其人の起居、動靜をくわ敷知れる母にして、斯の見分けを誤まりては、餘り不加斐なきとに候はん。將來の母たる人、父たる人迂濶に其兒を観識し玉ひそ。

普通教育

はさりとて忽諸にす可きものならず候へ共、近來教育法も追々簡便に相成候て、年月、時間の必要も段〱減じ候樣子なれば、普通教育を授くると同時に、獨立の業をも幷び教ふると容易にならんかと存候。よし茶の湯、香花の如き無益ではなくとも、さまで必要でなき技藝は略きても一方を先にす可しと存候、茶の席へ出て、茶椀の持樣知らぬ當惑は知れたものに御座候。他人はつれなく、我身は意氣地なく、子供には泣るゝといふ場合に立到らんよりは勝しに御座候。好き丈夫を撰んで令孃を配し玉ふは結構なり、産を分けてこれに與へ玉ふも何さら賀すべきことに候。されど令孃が其上にこれこそと安心して、万一の時の立身事業とし玉ふ可き程のものを仕込み玉ふ親切は鬼に金棒與ふる譯にて、慈悲深き親御の第一の義務は其時始めて果し玉ひしと申し上ぐ可く候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

家政

涼風を起す法

少樂翁

◎夏の家庭　は涼しきを最上とす。涼しきに、樣々あり。風の清らに吹入れて涼しきあり、水のさら〳〵と流れて涼しきあり、團扇をもて暫し送り出す涼しみもあれば、氷をのみて心をひやす涼しみもあるべし。左れど、此等は人の普ねく知る所ろにして、わざと玆に書立んとすれば、反つてあつくろし。夏の日の筆法にはあらじ。

◎夏の朝たは　日輪いと早く天に上り、霞を拂ひ霧をうすめて、好い加減の氣候をつくる。草あほく夕べの露をうるほし木の葉しげく日光をいろどる。此時や正に是れ夏日第一の好時刻。心氣爽然精神快濶の機なり。故に先づ早起きをもて涼を取るの最良法となす。

◎何故に蚊と云ふものは　夏の夜に出づるなるらん。月、うろこに似たる雲より破れ、星、大海洋と見ゆる天に浮ぶ。椽側ちかく居寄りて靜かに涼風を取れば、一日の勞苦、拭ふが如く、拂ふが如し。然るに、蚊と云ふもの文武とうるさく飛び出でて、失禮にも吾が膚を刺す。不屆の至と云ふべし。されど、獅子は小虫にも倒れ、豪傑も一疋の蚊にすら敵すると能はず。早々蚊帳のうちに逃げ入るの外あるべからず。蓋し造化は、人が夏の夜の凉を貪ぼつて夜ふかく露にうるほひ、意わずなが起して病にかゝらんとを心配せられ、蚊と云ふ天使を送り玉ふなるべし。文武の聲は、おろそかに聞く可らず天の音樂のかたみの聲なり。

◎蚊帳に入りて　暫らく雨戸を開き、あかしを暗ふして、差し入る月をながめ、團扇を弄して、家族したしく語る。此際まことに無量の清凉なからずや。

◎室内より風を起す　の奇法とは、潔よく取片付けて、そこゝを亂さず、一見して自づと生々たる感を得せしむるを言ふ。冬の日は如何にも重くろしかるべし。夏の日は、如何にもアッサリとすべし。飾りも、よそほいも、道具立も、器具も万物淡泊にして、且つ秩然たるべし。清風自づから其の間だより吹起らん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎身邊より涼風を吹起す　は、衣服を清潔にするにあり。美衣は好むべからず、清衣は尤とも望まざるを得ず。品の高からんよりは、數の多きをもとめ、かはる〳〵洗ひ張りして、サッパリしたるを上とす。

◎心中もし涼風なくんば　身外に風を迎ふるとも、厭熱は拂ひ去りがたし。心を清くして、思ひを美しくすれば、邪念自づから去りて、涼風、胸中より起る。洒々たり、落々たり。水の流るゝが如し。風の己が儘なるが如し。

◎あつし〳〵　と申すは、あつさを増すなり。己れもあつく感じ、人をもあつく感ぜしむ。暑熱に加へて更に熱氣を増すものと云ふべし。

◎一枚の衣を脱ぐ良法は　一枚を着ると思ふにあり。寒天もし一枚を重ねて暖を加へんとせば、先づ一枚をぬぐべし、而して後ち前の一枚を着なば、暖氣大ひに加はらん。夏の日は恰かも之と反對す。先づ一枚を着るか、もしくは、着ると思ふべし。其后は、涼風自づからにして増さん。袒裼裸躰にして、尙ほあつし〳〵と云ふものこそ不覺悟なれ。ハダカにして尙ほあつきときは如何んせんとする。

◎扇、うちわを遣ふは　必らずしも涼を増すの法にあらず。況んやセッ〳〵とあほぎ立てゝ、下に火熱を起し、上に汗をのごふは愚にあらずや。扇、うちわは、見るのみが、涼しげなり。少しく弄すれば、更に佳なり。主人よりすゝめられなば、一應は使ふべし、之れ見る人の心をすゞしくすれば也。眞とに扇、團扇の風によりて涼を取らんとすることそ、淺はかなれ。

◎前のと同じき理はりぞ　水にて躰をふけば、后にてあつし。寧ろ熱湯にうるほしたる手拭にてふくべし。清風、腐の穴よりして吹出づ。

◎夏の生花は室内に限る可らず　成るべく戸外庭前の生きたる花をながめんとすべし。室内のかざりは、室内に閉ぢこもる時の爲め也。室内に閉ぢこもるは、冬の事なり。

◎尙ほ多くなきにあらねど　一時にながく言はんは、涼を取るの主旨にあらず。次の日のおとゞとせん。

花ちるといとひしものを夏衣
たつやをそきと風をまつ哉

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

熱湯のきゝめ

しづ子

藥用向き熱湯の効能はなかく人の智識も信用も及ばぬことと存じられ候。餘り得易ければ、人は却つて、これを粗末にいたし、さほどのものとも思ひ候はず。併し熱湯の効能の中著明なる者數件を列擧いたし候へば實に左の通りに御座候。

第一。肺炎の萌し有之候時、咽喉に掀衝起り候時リウマチスに患み候時、極く素早く且つ適宜に熱湯を用ゐ候はゝ速かに全治すると御座候

第二。何種類に限らず、頭痛ある時、熱湯に足を浸し或ひは頸筋をこれにて蒸し候へば、早速に癒へ申候

第三。西洋手拭を幾重にも疊み、熱湯にひたし、これを齒痛幷に神經痛の患部にあて候はゝ、直ちに若悶を忘るゝと有之候

第四。フランチルか、もんぱの類を横に疊みて、熱湯に浸し、絞りてコロープを患ひ候子供の領へあて候はゝ十分間に快くなると御座候

第五。就寢前三十分位に、白湯を十分に飲用いたし候はゝ、便秘を癒し、腸胃の工合を甚だ好くいたす効能有之候。

第六。離寢後朝飯前一杯の白湯を飲用して、胃病を免れ候人は幾千の多きに達し候由、醫師の中にも胃病の輕きにはこれを勸め候ものよく有之候

片々

◎敢て一言を献ず

日本基督教會員　巖本善治

クリスチアンと目せられたる一敎派は、近年新たに吾國に傳道する一團躰の人士より成る。煩瑣の神學說を斥ぞけ、區々たる宗派を小さしとし、直ちに當年の基督に就きて、其神髓を學ばんとするもの也、其の機關雜誌たる「基督敎新誌」に對して寄せたる一文左の如し。

聖經は無上の寶典なり。吾黨は之に依りて道を識とり、之に順がつて立命安心を得。凡そ基督の徒たるもの、皆な之に違ふとあらじ。但だ、其の見解悟入する所の相異なるによつて往々異論なき能はず。是れ當然にして且つ不得已の事とす。故に、聖經を奉戴するの義に於ては相合し、之を見解するの理に於ては、相異なることを許す。約束嚴正にして而も自由

寛弘なること、余は『クリスチアン』に於て之を多しとする也。見解の異なるは可なり。之によりて宗を立て、同門の兄弟互ひに相争ふに至ては、不可なり。立宗立派倘或ひは可なり。ひとり其間に大同共交の道あるを辨せず、日夜同門相争ふことを知つて、而も巨敵大魔と戰ふことを忘るゝに至りては、慷歎すべし。此の弊に痛みて切に無宗派、大同團の旗幟を立つる、余は『クリスチアン』に於て之を壯んなりとす。

曰く、基督の徒。これ眞とに何等洪快なる稱目ぞや。區々たる分別の奇號を戴かず。單に主の名を負ふて戰に臨むは、吾黨が榮譽にあらずや。余は深く『クリスチヤン』一派の兄姉を重望す。

但た夫れ、新たに一道の意見を主張せんとするに當つては、尤とも精はしく其隊員の「人」を撰ばざる可らず。新たに主張するは、預言の事なり。預言せんと欲するものは、靈想高潔、信仰熱烈にして、而も度量洪潤に品行聖純ならずんばある可らず。此時に當りて、細々屑々の小人物暴りに此の座を侵さば、預言の神は之を不潔なりとして直ちに去つて棄て玉はんとする也。神が其意を人世に爲し玉はんとするや。必らず相應はしき人物を使ひ玉ふ。其人にあらずして豈に能く其事を成さんや。小人は、小人の事を爲すべし。預言者にして初めて預言の事を成すべきもの也。

此故に余は、『クリスチアン』の抱負に重望すると共に、其先覺たり引率たるの敎師諸君に人を得んとを望むや亦た切なり。不幸にして、此の一大事を誤まらば、折角にして將に來らんとする大恩寵の顯はるゝを妨たげ、反つて大に傳道界の革新を遲くせしめんとす。殷鑑歴々として近く數年前來の敎界にあり、吾黨は謹んで此の聖嚴なる神旨に聽く所ろなかる可らざるなり。余は『クリスチアン』の忠實なる友たらんことを期するを以て、玆に貝熱惻かる所なき衷情を陳言するもの也。

○敎育上の創見

敎育界、近來日本的の創見あり。西洋風のマネは、あらゆる部分に行われたり。政治及び社會上の風習のみにあらず。宗敎社會のみにあらず。敎育上の所論の如き、多くは西洋のものの直譯なり。直譯ならずば、義譯なりしに近來少し宛、

日本的の創見を開く。
神奈川師範學校長須田辰次郎氏曰く、小學校に於て實業科を授くるに當り、實地練習を爲さしむるが如きは、決して策の得たるものにはあらず、彼の歐米諸國の如く、常に實業に從事しつゝある父兄は、日々定まりたる工場などに出勤し、家に歸りては復た業を執ると稀なり。斯る仕組の國に於てこそ初めて學校にて、其子弟に實地の練習を課する必要はあれ、我國の如く、實業者の多分は常に己が家にありて業を執る習慣なるに於ては、決して斯る必要あるとなし、此の良敎授たる父兄を捨てゝ却つて素人たる小學敎師をして實地練習の指導をなさしめんとすること、例へば家鴨をして雛鷄を育てしめんとするに同じ。誠に顚倒したる話ならずや。

加藤弘之君は、其の小學敎育改良論中に曰く、
余が所見にては、今日の尋常科の如きは、昔時の寺小屋を改良して今日に適當するものとなすこそ、當然にして、斯くすれば、眞實一般の普通敎育たる旨意に叶ふものとなりたらんに、惜しひ哉、此方法によることを爲さず、全く學問的主義を以て一般普通敎育を施こさんとしたるが故に、遂に此の如き難文字難文章を用ひて兒童を困らしめ、其の腦髓を疲勞せしむるとゝなりしは、實に歎息の至りと云はざるべからず。

〇政治家と貧民の慘狀

曰く、政治家は貧民の慘狀を無視すべからずと。經濟雜誌の瀧與治氏は、精細なる論文を其近號より掲げ初めたり。先づ言ふ、抑そも貧民なるものは、何時に於ても必らず國家の累を爲さゞるなしと。而して、貧困の餘、遂に自殺の慘狀に陷いりし人數の增加。官の救恤にて僅かに生命をつなぐものの人數の增加。棄兒及び養育院入院者の增加。强盜竊盜にあひし人數の增加。貧困の餘、罪を犯せし人數の增加等をあげて、政治家は決して貧民を忘るべからずと論ぜり。

〇氣慨養成

大日本敎育會の演說者は云く、少くも中學校以上の學校には、擊劍の科を設けて、敵愾の銳氣を鼓舞したしと。彌よ此の問題に究するを見へたり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

偶感一二

士族四十万、尙ほ大方は生存せり。其が兄弟、二男、三男、今や、方さに壯んなり。一旦緩急事あらば、一百三四十万の壯丁、立どころに起らん。士らひ氣象未だ失せず、士族の名殘り僅に存するの今は、事を擧るに屈强の時機也。

十九世紀の戰かひには、器械の戰かひ多し。帝國の軍人亦頗ぶる之に得たりと雖ども、世界にだける其の特術の長技は、拔刀接戰にある也。之が爲めに、尤とも與みし易き敵は、夫れ支那人か。彼等、器械になれず、さりとて丈八の鐵棒を揮はん猛者も今は多からず。帝國軍人にして、其の長技を思ふまゝに顯はさんとせば、支那人と戰かふより善きはなし。

支那人の長所は、悠々たるにあり。一敗、又、一敗、而して漸次に力を恢復するは、豚が肉を削られて而して久しふして之を復するが如きは、支那膨大國の唯一の利益なり。もし、之を相手にせんとするものあらば、直入突進、數日にして其主心を刺すべし。斯る戰かひや、帝國軍人特得の長所なり。

支那は、永久の友たらまし。之を友とせんとせば、先づ其の不遜を挫かざるべからず。雨ふつて塵治まり、破裂して而して大調和す。支那と善隣の交りを爲さんとを欲するが故に、一應の衝突は避くるとなけん。

朝鮮は、吾國が保護すべき國なり、助成すべき國なり、其の改善維新の爲めには、必らず大ひに合力せざるべからず。東學黨たとひ平らぐとも、未だ容易すく兵を撤すべからず。

あはれむ可きは、東學黨なり。幾多の熱誠男子、必らず其うちに在らんに、彼等は、此たび到底死せざる可らず。左れば是れ國の改革の爲めに死する也。

逸楨の如きは、素より小人也。吾儕は初めより洪鐘宇の爲めに悲しみたり。彼が頑國なる愛國心は、小人の爲に陷はされたる也。左れば、小人此に刑せられて、彼のあはれむべき小慷慨士、兎に角、榮進せんとするは、天か。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時報

◎學校、教育

●裁縫速成科の増置　熊本なる私立尚絅女學校にては普通別科の外裁縫速成科を設け單に裁縫教師たらんとするもの丶爲めに六ヶ月の短期を以て修業せしむるの便を啓かんとて去る十四日同校長より其筋に願出たり尤も裁縫科專修の目的と雖も普通の讀書算術等は修め得たるものにあらされは入學を許さしといへり

●宮城女學校　仙臺なる同校に於ては、本月二十九日第二回卒業式を執行せり。

●女子學院　麹町區上貳番町なる同院にては、去る二十八日文學會を催し、翌二十九日卒業式を執行せり。

●神戸女學院　神戸なる同院にては去る二十七日卒業式を擧行せり、卒業生徒諸氏は左の如し。

高等科卒業生

藤本節　愛媛、妹尾安　岡山、

普通科卒業生

稲見歌　兵庫、林雄　同、加藤久國　愛媛、河越輝　鳥取、
片桐能代　宮城、多辻壽賀　鳥取、永井松　京都、山内千鶴　兵庫、
丸山絹　新潟、松永初　福岡、藤田益　同、荒木慶　岡山、
木山多喜　岡山、水谷小琴　兵庫、三宅壽　廣島、人見谷　京都、
森田郷　岡山、鈴木幸惠　兵庫、

◎片々

●裁縫十二戒　某氏なるもの、大日本教育新聞紙上に、裁縫十二戒なるものを記す聊か參考となるものあらんとて左に掲く

一、薄地又は古衣なとを縫ふときは漫りに針こきすへからす
二、たち物庖刀又は鋏の利鈍を試みたる後ならではたちきりすへからす
三、衣服の上へたち物庖刀又鋏を載せ置く可らす
四、入用より多くの絲を針に貫き絲の切れ端を捨つることあるへからす
五、白地の品へ色絲にてしかけを掛くへからす
六、待針とめ針なとを等閑にさし置くへからす
七、衣服のほころびを縫ろはで捨て置くべからす
八、汗手あぶら手を拭はす衣服を取扱ふべからす
九、入用より多分の糊を製し腐らしむるべからす
十、有り丈けの織物を裁つとき所々にて小切を出すべからす
十一、傷又は破れの縫になる小切を捨つべからす
十二、裁ちたる織地を亂雜にかされ皺を生ぜしむべからす

●女生飯を止めて燒出されに賑はす　過日横濱大火の折は、フェリス女學校女生一同夕飯に就かんとする場合なりしとて、即座之を中止し、燒出されの貧民に賑はしたるよし

●林麻子の永眠　横濱海岸教會長老林翁氏の令閨麻子には、客月來病床にありしが、去る十日永眠せられたり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●勤王家松尾たせ子の死去　巾幗の身を以て維新の際王事に盡力し女丈夫の名を轟かし勤王家を以て有名なる松尾たせ子は本月十日長逝せり審交ある品川子左の悼詞ありしと

一聲を信濃の奥に啼きすてゝ雲かくれにし山ほとゝぎす

●長壽者宮前れん子の來歷　群馬縣南甘樂郡神川村宮前れんといへるは寛政六年三月十三日の生れにて百一歳の長壽を重ねたる由今其來歷といふを聞くに

職業　少壯より針仕事を好み目下楮の皮剝及石臼挽を爲し一日として閑居したることなし

家屋の位置及構造　土地高燥にして人家稀疎四面皆山なり家屋は間口七間奥行四間木造板葺家根の平家にして居室は東北隅の奥座敷六疊にして空氣の流通宜し

衣服　絹布を用ふること稀にして清潔なる綿服を好めり

起居動作　午前七時頃に起きて業を執り午後七時頃寝に就く性活潑にして又外出を好ます曾て病氣のため藥用したることなく脊髓歪屈せす全體頗る健康なり

五感　齒牙悉く脱すれとも音聲爽朗なり視力は甚た弱く十間を隔つれは知人を辨別すること能はす聽官も亦た鈍く口耳相接して高談せされは感應せす

飲食物　常食は麥飯食馬鈴薯にして總て甘味を嗜み酒及煙草を用ひす毎朝玉蜀黍の粉にて製したる燒餅を喫ふ茶は山野に生ずる「ヒンサヽキ」の製葉を用ふ概して粗食なり食量は壯年者に劣らす平均四合許とす飲料水は岩石の間に湧出する清水を用ふ

血族及配偶　父八十五歳母八十七歳弟二人各々七十八九歳にて死亡し妹一人は三十歳にして死亡せり本人は二十四歳にして嫁し六十歳にして夫を失へり

貧富の度　本人か嫁したる當時より多少の財産あり常食の物は自己所有の土地より收穫したるものを以て之に充て裕豐なる部分なり

●京都婦人慈善教會　京都婦人會幷に京都婦人教會とも近來不振に付今度兩會合併して新に會員を募集し京都婦人慈善教會と云ふを組織せんと上下京區長其他の人々創立員となり勸誘中なり當分は會場を松原烏丸因幡堂とし來る九月を以て發會式を行ふ筈にて近日婦人中より十五名の創立員を設け尚ほ男子中よりも十五名の補助員を定むる由

●評論の評論　去る十四日の「福島民報」は「評論」二十五號を評して曰く、……は東京北豐島郡王子村下十條女學雜誌社の發行なり此一派の人々か出すもの文學界と云ひ女學雜誌と云ひ其他皆よく洋學を同化し來りて別に一種の文をなし或は流麗或は幽韻或は偉大頗る見る可し本號所載の博愛的愛國心の論は彼れ保守頑迷の條約履行者か消極的なるを痛擊したるもの、然れ共論者か彼等排外的履行論者に之を責むるは何の益もなし履行論は到底頑固の排外論たれはなり強兵の策豈錢を要せむや、評者の爲す事なきは亦國の一益なりとは共に奇警、生死論は編者の最得意なる者なる可けれと未た盡さゝる處有るか如く隔靴掻痒の感あり、透谷北村君を吊ふは悲淚多く讀むへからす、願くは花下に死せむは幽玄微妙物我を忘れしむ、北村透谷氏か遺稿なる慈善事業の進步を望むは高見卓拔、古聖の民と共に樂むの意、春の夕の歌は一徧感服し難し、米國法廷の不法は悱慨少しく足らさる感あり其他批評等面白く評論の名に背かす

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

櫻井明石君譯

希臘孝子腓立比物語

大形洋綴美製
正價金卅五錢
郵稅金六錢

今を距ると六十年希臘國の勇士等、土耳其國の壓制に堪へず義兵を擧げたりし時、一方の將となりたる、メサロスなるもの戰敗れて、其妻と共に奴隷に賣られて、遠くアラビヤのバグダッドへ連れ行れて、苦役に服しをり、其子腓立比其時六才なりしが、或人に養育せられて十七才に至りたる時、土國より遣はされたる管領の危難を救ひしが縁となり、管領腓立比の至孝勇猛を感じて莫大の金を與へ、船を用意させて兩親を贖ひに出しやり、船中にて腓立比は船長の危難を二度助け又船長の助言により腓立比基督の信徒の身を以て、土國マホメット宗徒の假裝を爲して、單身にて隊商の群に加はり愈アラビヤの沙漠に乘り込み、沙漠中にて其基督教徒なると露見し、殆ど生命も危かりしを、隊商の頭領其至孝と堅信とに感じて、大に腓立比を省みるに至り、後又隊商等がアラビヤのベドウィン族に剽掠せられ囚虜となりし時、腓立比も亦囚人となり、爾後幾多の艱難變遷ありて、終に酋長腓立比の志に感じアラビヤの健兒に護送させてバグダッドへゆるし遣り、バグダッドにて非常の困難に遇ひ大失望したりしも、圖らぬ助けを得て遂に兩親を奴隷苦役の中より十二年目に芽出度救ひ出しぬ。

朝野新聞の評　櫻井明石氏重譯　希臘孝子腓立比物語

是れ記者が三年の歲月を閱みして經營慘憺の間に成れるもの宜なり卷中の人物躍如として其の眞を顯はし一讀の下人をして感憤激勵嗚咽の情に堪へざらしむるや、飜りて想ふ我れの國を建つる玆に三千年其の間忠臣あり義士あり烈婦あり貞女あり善く世道の澆季を拒きしか今や人心維れ危く道心維れ微なり想うて玆に至れば余輩豈に感慨なきを得んや」女學雜誌社主は道德卓行の士なり。滔々たる天下輕薄是れ追ふの時に於て彼れは獨り万斗の熱淚を灑いて世の信仰ある德義あるの士女に同情を表せり而して今孝子の蹟を梓して世に行はんとす彼れの意を用ゆる深しと云べし

發賣所　東京神田區表神保町六番地

女學雜誌社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鈴木弘恭大人講述

第五版 百人一首講義

(附錄小倉てびき)

正價金廿八錢
郵稅四錢

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第四版品切に成りたれば茲に第五版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ〳〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すことを得る至極重寶なり。

文學界

第十八號六月三十日發兌

山家ものがたり　藤村
彈琴　蟬羽
旅寢の露　破蓮
みゝずのうた　透谷
流水日記　孤蝶
時文

一夕蝸牛○きくの濱松○民友派及早稻田派○お小夜○國華○新刊○透谷子追悼會

每月三十日發兌○定價一冊金六錢

發行所　下谷三輪町八十九番地　文學界雜誌社
發賣所　女學雜誌社書店

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵稅共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊(半ヶ年分)	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊(一ヶ年分)	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

一本誌購讀者は代價郵稅共凡て前金御拂込之事前金御拂込無之御注文有之候共一切送附不仕候

本誌代價郵稅共郵便小爲替にて拂渡局を必らず

一ッ橋郵便爲替取扱所へ宛御振込の事

一請取人は神田區表神保町六番地女學雜誌社と御記入の事。

一郵便切手代用は一割増(五厘切手に限る)にて申受候

一本誌御注文の節は住所姓名を明瞭に記載し號數は何號より何冊分と詳細に御書添への事

發賣所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

發行所　東京府北豐島郡王子村下十條八百五十一番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷(電話十九番)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY